

## 一 出会い

一粒食べた。「こんなにじゅうじゅうでうまい葡萄は初めてや。も一つ食ったろ」  
取ろうとすると突然目の前に大人くらいのものが現われた。自分より縦も横も二回りほど大きいか。

「わっ！何やお前！誰なんや！」

「あんたが呼んだから来たのに。何やお前、とは薄情な物言いやなあ」

「お前みたいなケツタイな奴、呼んだ覚えはない」

「そんなはずはない。あんた、あの葡萄一つ食べたやろ？」

「葡萄は食べた。あんまりうまくいったから、もう一つ食ったろと思たところやった」

「そらあかん。続けさまに食べたらあかんのだや。あんたが食べた葡萄はどんな色しとった？」

「そんなもん、覚えとらん。あつと言う間に食つてもた」

「あんたが食べたのは黒い葡萄やったよつて、わしが出てきたんや。あんたが呼んだんやで。そやけど次の葡萄は食べたらあかん。一回に一粒だけなんや。それが終わるまでは次のは食べたらあかん」

「何のこつちや、一回に一粒だけ？それが終わるまであかん？ようわからん話やなあ。

もつとわからんのは黒い葡萄食べたら黒い奴が出てきたことや。どないなつてゐるねん」

「あんたが食べた葡萄もわしの体も黒いやろ。これはあんたの悩み事を解決するための色、つまり、わしを呼び出す色なんや。ところでな、人間には『十人十色』っちゅう言葉があるな」

「知つてる。学校で習た」

「なんて教えてもろた？」

「十人おつたら十人とも違うんや。自分と同じ人はいてへんつて」

「その通りや。それをよう覚えとき。人は皆違う。そやけど人は同じところもようけある。

例えば人から殴られたら誰でも痛いし、殴られとうない。そやな？」

「おっさん、ひよつとして次郎長が殴られてたこと、知ってんの？」

「ちゃんと見とつたからな」

「おっさん、誰なん？人間ちやーうん？」

「わしは人間や。けど人間やない」

「何や、どっちやねん」

「両方や。元は人間やった。ある時から鬼にもなれるようになった。どや、珍しいやろ？」  
「自慢しとんのか？ふうん、おっさん、鬼やったんか。けど角ないやん。嘘言うてるやろ」

「いやいや、鬼もいろいろでな。『十人十色』やのうて、鬼の世界では『十鬼十色』って言うんや。わしは角がない。これは珍しいんや。何が珍しい言うて、人間にも鬼にもなれるんやで。そやからわしは自分のことを国宝級やと思てるけど、他の奴等はわしのこと、普通やないて言うんやな。目に見えるところで違うと、あいつはおかしいって囃し立てるけど、心の中はどや？みんな考えることは一緒か？人と違うことを考えてると、あいつ普通やないて言うか？言わへんやろ？何でやと思っ？」

「そら、口に出して言わんと何考えてるか分からんやろ。そやから、普通やないて言えんのや」

「ええとこに気がついたな。でもな、何をするかをよう見てたら心の中が分かることもあるねん」

「心の中で思てるだけやったら、いくらよう見ても俺にはわからん」

「あんたは誤魔化すことを知らんから、そう思えるんや。大人も子どもも、皆うまいこと誤魔化しよる。そういう人は必ずけつたいな仮面被ってるから、わしにはすぐに分かる。よっしや、今日は特別や。ええもんを見せたるわ」

「うまいこと言うてもあかんや。ほんまにええもんか？」

「ええもんと思えへん人もいてる。けど、あんたはあとで、ええもんを見せてもらた、ときつと思はずや」

「ほな、早う見せてえな」

「まあまあ慌てるな。まずわしの話を聞いてからや。・・・」

さて、葡萄には全部で十色あるんやけど、その人に見えるんは一色だけ。それも一房だけなんや。わしは全部見えるんやが、あんたら人間には一人、一色、一房しか見えん。悩んどる事が違ったら見える色も違ってくる。あんたの場合は黒い葡萄が見えたんやな。それでわしが呼ばれて出てきたつちゆうわけやけど、あんたは今何をしたいと思てんねやろ。自分の口で言えるか？」

「そんなにすらすらと言えたら苦労はせん」

「大き出たなあ。わしは鬼やから、あんたが言うても他の人間に喋ることはあらへん。

安心して喋ってみるか？」

「ちよっと自信ないけど・・・」

「よし、ほな二粒目を食べてみ・・・」

どや、ちよっとは喋る気になったか？」

「行けそうな気がする・・・俺はようわからんや。次郎長のことやで。あいつは根っから悪い奴とちゃうと思う。ずっと近所で一緒やったから分かってるつもりや。そやのに何で殴られるんやろと思うんや。次郎長がすることはようないかもしれん。みんなは誰がやったか分かっているから、その度に先生に言い付けるやろ。それが溜ってくる」と先生が親に言うんやな。そうすつとお父さんが殴っているような気がする」

「成程な。そうするとあんたは、次郎長の気持ちを知りたいんやな」

「次郎長だけやのうて、次郎長のお父さんの気持ちも知りたいんや」

「要求の多い子やなあ。まあ、わしら鬼は呼び出した人間の言うことを聞きいれるのが決まり。ええやろ、叶えたる。どっちからや？」

「そら、次郎長や」

「よっしゃ・・・」

それにしてもなあ、あんたは強い運を持つてるな。次郎長を何とかせなあかんちゅう、その気持ちが通じたんかもしれん」

「どこに通じるねん？」

「鬼の世界やな」

「鬼の世界に通じると、どないなるねん」

「そら、あとから分かる。ちよっとわしの言うことを聞き・・・」

実を言うとわしはな、あんたみたいな子どもにも葡萄が見えて、それを食べることがあるんやなあと思ってる。強い運で言うたんは、そういうこつちや。葡萄が見えんくて、食べられへん子は、自分の気持ちや悩みを人に言うことも出来んで、心の中に閉じ込めてしもたままなんやで」

「そんな可哀想やん。俺みたいに葡萄を食って、鬼さんに聞いてもらたら、ちよっとは違うんやないか。ずっとそのまんまやて、可哀想や。何とかしたり」

「わしも何とかしたいんやけど、わしからは手が出せん。人さんの方が葡萄を見つけて食べんことにはどうしようもない。何でそうなんかはまだわからんや。そのことは鬼の世界でも、大きな研究課題になっとるんや。いずれにしても、葡萄が見えんかっ

た子らは悩みを閉じ込めて、それに耐えられんようになる、もうどうでもええわとか、自分なんかおらん方がええんやと思てしもて、川の向こう側に行つてしまふのもぎょうさんいてるといふ統計も、こないだ鬼新聞に出てたわ。

けどあんたは運が強いし、簡単には死なんようにできてる。守られてるんや」

「何に守られてるん？」

「そやなあ。何にやて、はつきりとは言えん。無理に言うなら、あんたを守つてるのは、あんたの目に見えんもんや。目に見えんもんちゅうのは、実は見えるもんよりずっと多いんや。わしは鬼やから、わしには見える。けど、あんたら人間には見えん。見えんもんがあんたらをじーつと、そしてずーつと見つめ続けてるんや。これを「ジーズーの法則」と言うな。そして、どんな仕組みか分からんけど、死ぬ時を決めていくんや。そやからあんたは、自分のことを運が強い人間やと思つて、これから生きていくんや。どんなに辛いことがあつてもやで。何や、信じられんちゅう顔してるな」

「運が強いちゅうのはどんなことなん？」

「まだ分からんことやな。あんたには早すぎる。・・・」

ああ、そや。もう一つ言うとかとな、世の中はええ人ばつかやないんや。嫌なことを言うたりしたりする人もおるんやけど、それには何か訳がある。その訳うちゅうのは人によつてみんな違ふけど、何でそんなことするんやろと考えたり、自分がその人やつたら同じ事をするやろかと考えたりすることは大事なことなんやで。嫌なことをするつちゅうのはな、ええ人で生きていことしてるのに、何か具合の悪いことがあるからかもしれない。そやから、どこで具合が悪かつたんやろ、どうなつたら具合よくなるんやろつて考えるのも大事なことなんや。あんたが考えるのはまだ難しいかもしれんがな。

じつと抱きしめてやつたり、ずつと側におつたるだけでも、あつ、これも「ジーズーの法則」やで。それだけでも淋しさがのうなつて、素直になることもある、つてなことゝを鬼つちゅうのはぎょうさん経験してるねん。実を言うとな、わしら鬼は、じつと抱きしめて、泣かせるのが得意技なんや」

「泣かしたらあかんのとちやうか？」

「いやいや、殴つて泣かすんとちやうよ。泣かんのが男らしいとか、泣くのは女々しいとか言うけど、そら嘘や。人は泣くことが大事なんや。めつちや面白い事があると、笑いすぎて涙が出てくることあるやろ。笑いすぎて涙が出るのに、悲して、淋して涙が出やん。これはあかんのや。悲して泣く、淋して泣くのは弱虫やて言われるけど、それは

間違ってる。そんな時こそ泣かなあかん」

「次郎長が泣いてるとこなんか見たことないよ。それはあかんのか」

「そやな。自分で我慢して泣かんようにしてる間は、心は晴れんな」

「それやったら次郎長は救われやんのか？」

「少なくともわしが救うことは出来ん」

「何でや。鬼はみんなを救うてくれるんとかやうのんか？」

「あんたがわしに会うたのは何でやった？」

「そら、葡萄を見つけて食ったからや」

「残念なことに次郎長には、目の前にぶら下がった葡萄が見えん。それがその人の運命なんや。そやからわしにはどうすることも出来ん」

「そんな事言わんと、次郎長を助けてえな」

「鬼の得意技について話したのを覚えてるか？」

「そんな前に聞いたことなんか忘れてるわ・・・うくん、何やったかなあ」

「若いのにそんなジ―サンみたいなこと言うててはあかんな」

「おっさんと同じにすな。何やったかなあ・・・思い出した。泣かすこっちゃ」

「そや。それがヒントやけど、あとは言わん・・・さて、あんたは今、次郎長の気持ちを知りたいんやったかな？」

「そや。先ず次郎長な」

「わかった。ほな、そこにある葡萄な。もう一粒食べてみ」

言われたほったろうは、一粒取って口に入れます。

「そろそろ何か見えてきたもんがあるかな？」

「あつ、こらあかん。次郎長がこっちに來よる。えらい鼻息が荒そや。はよ逃げよ」

「いやいや、待たんかい。よう見てみ。次郎長はあんたがそこにおることに気づいてるか？」

「そう言えば、俺のこと見えてないみたいや」

「あんたはじっとしてそこにおり」

「おつても平気なんやな。それにしてもどないなってるのやろ」

「これから起きることをよう見てるんやで。喋ったらあかんで。黙ってな」  
ほったろうは鬼の言葉を聞くと、一つたりとも見逃すまいとして、じっと目を凝らして

います。

## 二 次郎長と父親

### 二一（次郎長の独り言）

確かに俺は他の子が嫌やなと思うことを言うたり、消しゴムほついたり、靴を片方ほかしたり、いろんな悪さをしてる。そやから言うて先生もいちいち親に言わんでもええのに。

俺にかて理由（わけ）があるんや。皆と仲ようしたいのに、鞆をゴミ箱に入れられたり、お前は臭いって言われたりする。俺に言わしたらどっちもどっちや。けど俺は先生に告げ口はせえへん。そんなガキみたいなのはな。もう中一になったんや。

皆の言うとおりで俺は臭い。けどうちは貧乏やさかい、毎日風呂に入れるわけやないし、頭洗うのも週に一遍や。お母ちゃんに何とかならんの？って聞いても、お父ちゃんに言い。お父ちゃんに言うても、そんなこと言うんなら他所の家にもろてもらえ。しゃあないから黙ってるんや。それしか俺の出来ることはあらへん。二人とも一生懸命働いてるし、俺は何も手伝えん。文句言わんと気持ちよう働いてもらうことしか考えられん。

7 / 14

家ではそんなして我慢してるけど、学校行って他の子が楽しそうに喋ってるのを見ると、お前らもちよつとぐらい我慢してもええやろ、って言いとうなって無茶してしまふ。やったらあかんと思うてるんや。やられた奴は怒つとるし、やった自分もちつとも嬉しゆうならん。親に言われても仕方ないとは思うんやけど、先生は俺のこと、ちゃんとした大人になれるようにって考えてくれてるんやろか。他の子も悪いことしとんのに、親に言われるのは俺ばっかや。

そこまで考えて、そのあとわからんようになってしまった。学校へ行っても毎日おもしろない。このままやったら、どう考えてもええ大人になれへん。俺なんかおらんでもええか。

「ほんまか、次郎長。お前、そんなこと思ってたんか。このままやったら次郎長は誰にも助けてもらわれへん。何とかしたりたいなあ。親は次郎長がこんな風に思ってる事、知っ

てるんやろか。」

「あんた、今度は親の気持ちを知りたなってるな。そしたら・・・」

「葡萄を一つ食べるんやろ」

「そや、世話のかからん子や」

ほったろうはまたまた一粒取って口に入れました。ああ、これも甘くてじゅうしいやなあと思っていると、次郎長の父親が見えてきます。椅子に座って一人で考えているところでした。

## 二―二（父親の独り言 その一）

何でやる。また次郎を殴ってしもた。あんだけ殴ったらあかん、もう止めとこ思うてたのに、気づいたら殴ってしもとつた。俺は父親には向かんのかなあ。次郎かて憎いわけやないんや。あいつがクラスの子らにちよつとずついろんな悪さをしよる。小学校の頃からや。

初めは大目に見とつたのに、口で何遍言うても止めよらん。親に申し訳ないとは思わんのか。そんな風に考えてしもて、口で言うより先に、軽う手が出てしもたんが始まりやった。あいつを何とかせんと、父親失格ちゆうことになってまう。どうしたらええか俺には分からん。家におけるのがほんまにしんどなってる。

8 / 14

「お父さんってこんな人やったんか？次郎長が可哀想すぎるやんか。これやったら殴られ損やで。お父さんは自分のことばっか考えて、次郎長が何で悪さをするんか、ちつとも分かってない」

「あんた、えらい鼻息が荒なってるで。もうちよつと落ち着いてな。あんたはさつき、次郎長が何で悪さをするんか、ちつとも分かってないって言うたな。それと同じ事がお父さんのことにも言えるんとかやうかな？」

「そうかなあ。そう言えば、次郎長のことばっかして、お父さんのことは考えてなかったわ」

「そこやで。お父さんが何でそうなってるのかを考えんな」

「お父さんのことなんか、俺には分からん。どうしたらええんや？」



「次の葡萄を食べてみ」

そやったそやった、と思ったほったろうが一粒食べると、父親が昔のことを思い出しているところが見えました。

## 二二三（父親の独り言 その二）

一つ心配は、子どもの心に入っていけるかやな。俺の親父も子どものことが分からなかったみたいやからなあ。

親父の親父、つまり俺の爺さんやけど、この人は働いたことがない人やった。山林を含めて財産がぎょうさんあったらしいけど、家族や親戚の誰にも相談せんと勝手に売り払うて、全部自分の為に使うてた。親父が小さい頃の話や。

親父のお袋さん、つまりおれの婆ちゃんや裁縫の腕があつて、繊維工場に集団就職した若い娘さんたちに教えて、それで何とか暮らしてたんやけど、爺さんは金をせびって婆ちゃんを殴ってたらしい。

あの日も金を取られたあとやったんかな。婆ちゃんが親父を連れて外へ出た。親父は爺さんは好きやなかったけど婆ちゃんは好きやったんで、一緒に出かけるのが嬉しかったそうや。気がつくくと線路のそばに来とつて、それまで何も喋らんかった婆ちゃんが突然、「久雄、お母ちゃんと一緒に死の。」親父は体が震えて、返事が出来なかった。幸い、本数の少ない地方鉄道のこと、どんだけ待っても来る気配がない。とうとう婆ちゃんは我慢が切れてその場にへたり込んでしまった。涙が涸れるのを待ってから婆ちゃんは親父を連れて家に戻った。その2年ほど後に婆ちゃんは病気で亡くなったそうやが、本当のことは分からん。

小6で一人っ子の親父は、爺さんが面倒を見るわけもなく、叔母さんの家に預けられた。「居候 三杯目には そつと出し」って言うけど、ほんまやつて。中学へ行つて柔道や剣道をやつたのは、大きなったら爺さんを自分の手でやっつけてやりたい、その一心やったそうや。食べ物には不自由したけど体も大きくなって、なぜか爺さんに復讐することもなかった。

お袋と結婚して俺が生まれた。小さい頃はかわいがってくれた。けど、俺が小学校の高学年になると、あんまり喋ってくれんようになった。自分がその頃からあと親と接した経験がなかったんや。自分は進む道を一人で切り開いてきたっちゆうこともあって、俺にも自分で生きてけって言いたかったんかな。

勉強でええ成績を取れとしか言わんし、大きな体がそばにおるだけで圧倒された。小学生の頃に一度、親父がお袋と話をしとって気に入らんことがあつたかして、ちやぶ台をひっくり返したのはびっくりしたし、怖かったな。俺は中学生になつても高校生になつても親父に相談は出来んかった。何を言うてもそらあかん、って言われそうに感じたからや。

そんな俺が大人になつたんやけど、やつぱり子どもと顔つき合わせて話をする事が出来ん。次郎のことかて、俺が思てることを落ち着いて伝えたらもうちよつと何とかなつてんのに、何でわからんのやと思うから、口より先に手が出てしまう。やつぱ父親になるのは無理なんかなあ。

「お父さんの心の中はこんなやつたんか。見かけだけでは分からんもんなやな」

「この人かてな、心が苦しなつてきたときに、話を聞いてくれる人がおつたら、全然違うたやろな」

「そやけど皆そうなんとちゃうか？自分のことを他人（ひと）には言わへんで」

「そこが問題なんや。誰にも相談できへんと、一人で抱え込まんならん。自分一人で解決するのが一人前の人間やと思ひ込んで。そやから、悩んだり、苦しがつてることを人にわからんようにするため、その度に仮面を被ることになるんや。普通は何枚かで済むんやけど、人によっては何十枚も被ってる。全部自分の心を隠すためやけど、仮面には気がつかん。仮面は薄いんで、何十枚被っても重くない。最近ちよつと顔がむくんできたかな、と思うぐらいや。そやけど被れば被るほど、自分の心が隠されてしまうんやな」

「次郎長もお父さんもそうなんやろか。仮面を被ってるんやろか」

「そうや。本人たちは気づいてないけどな」

「取つてやることはできへんのか？」

「一つだけやれることがあるな」

「何やの、それは？」

「さっき言うたで。鬼の得意技や。あとは自分で考えるこつちや」

### 三 鬼の得意技

三十一 (ほったろうと次郎長)

ほったろうはどうすればいいのか考えながら、とにかく次郎長に会わなければと思い、家に向いました。家の近くまで来ると次郎長が家を飛び出してこっちに向って走ってきます。次郎長！と声を掛けるとほったろうに気づいた次郎長が立ち止まりました。近くでよく見ると唇の端がちよっと切れて血がうっすらと出ています。ほったろうは次郎長のことを思うと、自分でも気づかないうちに次郎長を抱きしめていたのです。

「次郎長、今まで辛かったんやろ？」

何故かこの言葉が自分の口から出ると、ほったろうは更に強く抱きしめます。次郎長は、男に抱きつかれて照れ臭いためか、ほったろうを振りほどこうとしますが、すればするほどほったろうは強く抱きしめます。とうとう次郎長が諦めてじっとしたままになっても、ほったろうは抱きついていました。次郎長の目から一つ一つと涙がこぼれます。涙が出なくなったときには辺りは暗くなっていました。

三十二 (次郎長と父親)

「お父ちゃん、そんなに無理せんでええで」

こんな風と言う次郎長は何故か父親にしがみついています。

「俺を殴るんは、ちゃんとした大人にしたろて思てるからやろ。けどな、お父ちゃんから殴られんでも俺はお父ちゃんが言いたいことは分かっている。何がええ事で何があかん事は分かっているつもりや。殴らんでも言葉で言うてくれたらよう分かる歳になつて。今日みたいにアホな事をまだまだすると思うけど、自分が気持ちを強う持って、あかん事はせんように頑張る。お父ちゃんから殴られると、頑張ることができんようになるんや。他の子にいたずらしたつたらええんやと思うてしまふ。された相手がどんな気持ちになるか考えるより、自分の気持ちをスッキリさせたいと思てしまふねん。そうすつとだんだんと俺の周りから友達が遠くなつてくんや。」

お父ちゃんは俺を殴るやろ。そやけど俺はお父ちゃんから遠くへ行つてしまふことは

できん。この家が俺の居場所やからな。お父ちゃんはこの家が居場所と違うんか？お母ちゃんにも俺にもこの家から出て行ってほしいんか？それともお父ちゃんがこの家から出たいんか？そんなんどっちも嫌や。俺はお父ちゃんのこと、ほんまのお父ちゃんやと思うてる。小さいときはよう一緒に遊んでくれたやんか。家族で出かけることはあんまりなかったけど、俺にもほんまのお父ちゃんができたと思って、嬉しかった。

俺が小さかったとき、車に轢かれそうになったことがあったん、覚えてる？覚えてるわな、お父ちゃんの足がそんなんになってしもたんやから。俺はお父ちゃんのこと、命の恩人やと思うてる。お父ちゃんは大事な人や。そやから今まで殴られても我慢しとつた。お父ちゃんが俺のためやと思ってやってるんやから、何されてもしやあないと思てきたんや。けどな、ほんまの事言うと、殴られるたびにお父ちゃんが俺から離れていくように感じてたんや。淋しかった。そやからどうしたらええか分からんと、学校みんなにいたずらしとつたんや。そうやって自分の心をごまかしてたんや。

けど、もうあかん。俺は自分に我慢がでけんようになってきた。今のお父ちゃんにも我慢でけんようになってきた。どうしたらええのか分からんので家を飛び出したら、ほつたろうが俺のことじっと抱きしめてくれたんや。今まで辛かったんやろう、つて言うてな。何で知ってんのか分からなかったけど、俺は嬉しかった。自分の気持ちがひんやりしてきてな。今までカッカしてた俺の姿が自分で見えたんや。

その時やで、このままでは俺はあかん。俺もお父ちゃんも、そしてお母ちゃんもあかんようになってしまおうと思うたんや。なあ、お父ちゃん、もう一遍言うで。お父ちゃんは俺の命の恩人やし、ほんまのお父ちゃんやで」

次郎長はそう言いながらぼろぼろ涙を流しています。息子に抱きつかれた父親も、側におって二人の様子を心配そうに見ていた母親も、揃って涙でした。

翌朝登校してきた次郎長を見ると、口の端にテープが貼ってあります。そして、滅多に見られない笑顔で「おっはよう！」とクラスのみんなに挨拶する姿を見て、ほつたろうは自分のしたことが間違ってたか確認しましたし、あの時葡萄を食べてほんまにええもんを見せてもろたなあと思ったのでした。

#### 四 葡萄は一房か

ともすれば付き合いがうまくいかず、問題発言の多いほったろうは、「言い方がきつい」だの「自分だけが分かったような物言いをする」だの「上から目線じゃないの？」などと陰で言われています。ほったろうも自分で分かっているのですが、なかなかうまく行きません。そして、何かあるたびに、鬼から言われた言葉を思い出しています。

「あなたには葡萄が一房見えた。それは十八歳になったら鬼になれるかもしれん、ちゆうことでもあるんやけど、必ずなれるわけではないんや。ようけの鬼があんたを見る。何を言うて、何をしたんか、みんなが見てる。鬼にしてもええかどうか決めるためや。」

十九歳になるまでの一年間であなたが葡萄を一房も見れんかったら、鬼にはなれん、ちゆうことや。もう一房見えたら鬼の仲間入りや。けど、他の人と競走して勝ったらなれるんとちゃうで。自分の為やのうて、他人（ひと）の為にどんだけできるかや。

葡萄はもう一房見えるんかな、それとも見えんのかな？それはあんた次第。楽しみに待ってるで」

(おわり)